

一 国社会主義から民主社会主義へ

——佐野学・鍋山貞親の戦時と戦後

福家崇洋

目次

はじめに

一 一 国社会主義運動

(一) 「転向」の位相

(二) 反ファシズムの最前線

二 東アジアへの動員

(一) 階級から民族へ

(二) 「対支工作」の提言

(三) 「転向」の広域化

三 懺悔道と大陸行

(一) 自己批判の先に

(二) 「敗戦処理」の行方

四 一国社会主義運動の再建

(一) 共産主義の「日本化」

(二) 労農前衛党

(三) 日本政治研究所

五 労働民主化運動の支援

(一) 北京の民主策進研究会

(二) 世界民主研究所

(三) 独立青年同盟問題

六 民主社会主義への結集

(一) 民族と階級の相剋

(二) 民主社会主義連盟

(三) 非公認の立候補

おわりに

はじめに

日本共産党幹部の佐野学（一八九二—一九五三）と鍋山貞親（一九〇一—七九）は、一九二〇年代末の党弾圧に伴い、治安維持法違反で検挙・起訴された。その後の裁判では他の党幹部と「獄中央委員会（仮称）」を結成、党再建と戦争危機への対処を目指して公判闘争を繰り広げた。¹しかし、一九三二年一〇月の第一審判決は二人とも無期懲役であった。佐野から鍋山に重大な話がもちかけられたのは翌年一月末のことである。

当時コミンテルンの「三三テーゼ」を受け入れ、天皇制廃止を掲げながら非合法活動に邁進していた日本共産党からすれば、「転向者」は没落者であり、裏切り者であった。この硬直した認識は一九三〇年代だけではなく、「獄中十八年」を経て共産党幹部が出獄してきた敗戦後にも受け継がれた。今なお「転向」という言葉にまとわりつく挫折や変節といったイメージは消え去っていない。

こうした図式を批判するため、これまで思想の科学研究会編『共同研究 転向』（改訂増補版、一九七八年二月、平凡社）のほか、伊藤晃『転向と天皇制』（一九九五年一〇月、勁草書房）など優れた研究が世に送り出されてきた。また、近年では佐野、鍋山の「転向」を「戦時変革」（現代化）の萌芽と見る米谷匡史氏の説や、²この説を受け継ぎつつ戦後や東アジアという新たな問題系と結び付けて「転向」を捉え直そうとする戸邊秀明氏の説が現れている。³

しかし、「転向」の震源地であるとされてきた佐野、鍋山を対象とした研究は、今日でも驚くほど少ないのが現状である。彼らと「転向」の関係を真正面から取り上げたものは高島通敏「一国社会主義 佐野学・鍋山貞親」（前掲『共同研究 転向』収録）まで遡らなければならず、抜本的に描き直すことが求められている。⁴

これら先行研究や問題提起を受け継ぎながら、いまだ実証研究の乏しい「転向者」佐野、鍋山らの戦前から戦後にかけての思想と軌跡を明らかにし、従来の「転向」観に新たな問題提起を行うことが本稿の目的である。

一 一国社会主義運動

(一) 「転向」の位相

今日、「転向」は、佐野、鍋山声明（一九三三年六月）以後の問題として捉えられる。ここで「転向」を共産党との関係から一旦離れて、一九三〇年代社会運動との関係で捉え直せば、ある運動に対して「転向」という語句が用いられたことが新聞記事から確認できる。それは、満洲事変（一九三一年九月）前後において無産政党内の国家社会主義勢力が新党の結成を目指す動きであった。つまり、この時期の「転向」とは、満洲事変によつて湧き上がった国民の愛国心を背に、広義の「左派」政党から右旋回した勢力が新たな政治、社会運動を目指す動きとしてイメージされたということである。だとすれば、「転向」を共産党からの「転落」と見るのではなく、新たな社会運動を生み出す動きとして捉えることも可能なのではないか。実際、佐野、鍋山らの「転向」声明には、共産党の「ブランキズム」（銀行ギャング事件など）や「急進小ブルジョア」的傾向を批判する一方で、一国社会主義運動を目指す言葉も記されていた。今日、一国社会主義と言えば、スターリン支配下のソ連社会主義体制というイメージが強いが、戦前、戦時の日本でこの言葉を大々に打ち出したのは彼ら「転向者」であることは知られていない。

第一審判決後に「思想動揺」を来したという佐野、鍋山は、一九三三年二月頃、市ヶ谷刑務所長に「思想の転向」を披瀝し、ここに手記作成の許可を与えられた。この手記こそ「緊迫せる内外情勢と日本民族及び其労働者階級」（同年五月中旬）と「共同被告同志に告ぐる書」（同年六月八日付）であった。当時各雑誌に掲載され、それゆえに獄外でも多くの反響を呼んだのは後者で、日本共産党とコミンテルンへの批判に重きを置いた内容だった。

これに対し、彼らの新しい方向性が打ち出されたのは前者である。「緊迫せる内外情勢」とは満洲事変を契機とする戦争勃発とその国内的影響を指すが、彼らはこの「来るべき戦争」と日本の植民地支配を肯定したうえで、一国、すなわち日本、満洲、台湾、朝鮮の各勤労者（民族）が前衛となつて（ただし「優秀」な日本民族が中心となつて）社会主義の実

現を目指すことを訴えた。

しかし、その「社会主義」は国内に階級対立をもたらすのではなく、新たな社会統合原理である「民族」を「労働階級」が主導する社会主義になる。とくに彼らの主張では、この「民族」に力点が置かれ、対立的に捉えられてきた民族と階級の関係が「如何に発展的に関係するか」という視点から再構成される。⁵⁵

けれども、この一国社会主義論や民族の重視は、時局への拘泥という意味で危うさを含むものであった。というのも、彼らは日鮮台満中の関係をアジア的停滞性論に基づいて考察していたし、遅れた文明を今なお持つアジアを奇跡的な近代化を遂げた日本が指導するという大亜細亜主義お決まりの構図にはまり込んでいるからである。彼らは言う。「我々の積極的原理とは、日本に於て優秀なる一国的社会主義を建設する民族的能力及び国民的努力に就いての確信、ならびに、資本主義に反して、自己を解放せんとするアジア諸民族の間の共同努力たる、プロレタリア的意義に於ける汎アジア主義である」⁵⁶。

また、それとセットになるのが弱小民族蔑視論であり、「国家的独立を有しない植民地半植民地民族や、ヨウロツパに群立する小民族が排外主義的に一国社会主義の可能を主張しても反動的たるにすぎぬ」⁵⁷と述べられた。

佐野、鍋山の「転向」は獄内外に大きな反響を呼び、同時期の雑誌は「転向」問題一色となった。⁵⁸二人は共産党や傘下の労組から批判、除名の処遇を受けたが、獄中の党幹部から共鳴者（高橋貞樹、三田村四郎、中尾勝男、杉浦啓一）を生み出した。彼らは六月末から次々に声明書を発表し、各自の立場から佐野・鍋山の共産党及びコミンテルン批判に共鳴した。⁵⁹

一方、一般黨員への影響については、同年七月末の統計によれば、未決約一四〇〇名の三割、既決約四〇〇名の三割五分が「転向」した。しかし、動機を見れば、「佐野、鍋山の転向理論に賛成した者は、河上肇博士流の転心や政治的無関心の転心、宗教への転換等に対して極めて不成績」であった。⁶⁰つまり、佐野・鍋山の「転向」とその後の一般黨員たちの「転向」は必ずしも一体ではなかった。

その後、佐野学らの中で一国社会主義運動への意欲は高まっていった。一九三三年八月に獄中の佐野が妹に宛てた手紙の中では、共産党のプチブル化を批判し、「日台鮮を範囲とする一国的社会主義」の実現、「新しい前衛の組織」形成、合法大衆運動の目標に言及された。また、裁判前に妹に送られた手紙（一九三四年二月一九日付）では、「自称マルクス主義者」のアジア的生産様式論が批判され、日本民族の優秀性が改めて語られた。¹⁶

一九三四年三月末から「転向五巨頭」（佐野、鍋山、三田村、高橋、杉浦）の控訴審が東京控訴院で開始された。彼らはこの公判を通して一国社会主義理論を公にする戦略に打って出たが、検事の目には「一国社会主義は転向にあらず」、「戦術的転向」にすぎぬ、「日本の国法に背馳する」など依然として危険思想に映った。日本共産党の弾圧に「転向」を最大限利用しながら、新しい合法社会運動をいかに抑制するかが当局の方針といつてよい。

このため検事は、第一審より軽いものの、佐野、鍋山に懲役一五年を求刑し、そのままの量刑が判決（同年五月）で言い渡された。¹⁷佐野、鍋山が既決囚として市ヶ谷刑務所から小菅刑務所に送られるのは同年末である。

（二） 反ファシズムの最前線

佐野、鍋山らに共鳴して一国社会主義を奉じていた中尾勝男（元党中央委員）は祖母と会うため一九三四年六月に保釈出所を許可されるが、¹⁸この機を利用して一国社会主義運動の樹立を計画した。

中尾は、四月に保釈された西村祭喜（元全協中央委員）と連絡を付け、同年八月頃から一国社会主義研究会を開催し、規約や趣意書、運動方針、組織の拡大などを協議した。¹⁹中尾、西村以外に河内午之助、久津見房子（三田村妻）、渡辺多恵子（旧姓志賀）、豎山利忠らが獄外メンバーだが、「獄内ニアル佐野学、鍋山貞親、佐野博、川崎堅雄、田中清玄、高橋貞樹其ノ他転向派」に指導されていた。²⁰

彼らは一国社会主義の理論啓蒙と合法大衆運動の展開を目指したが、最初の事業は佐野、鍋山の主張を刊行物として世に送り出すことだった。木下郁編『日本共産党及コミンタールン批判 一国社会主義に就いて』（一九三四年七月、無産

社)がそれになる。佐野の従兄弟である木下は、佐野、鍋山の弁護も担当した。出版の話は五月以降に佐野と高瀬清の間で進み、⁸²獄外の河内、久津見の尽力によって刊行に至る。しかし、すぐに発禁となり、同志に極秘で配布された。⁸³

出版を引き受けた無産社とは、高瀬、近藤真柄が主宰していた出版社で、堺利彦(近藤父)、山川均、荒畑寒村、近藤栄蔵、猪俣津南雄、菊川忠雄らのパンフレットを出していた。彼らの多くは第一次共産党幹部だったが、第二次共産党とは離れて「労農派」に属した。

編者の木下によれば、同書は「佐野学君等の第二審公判立会弁護人となるに及び昨年十一月、弁護資料として、獄中の佐野君より聴取したところを纏めたもの」で、「転向」から半年経た佐野らの主張がより明確に記載された。一国社会主義論は従来の主張に沿ったものだが、この思想を各国プロレタリアートに見られる世界史的な傾向として把握しようとしたことが特徴である。

彼らは、ドイツ共産党が反ナチスへの戦略として打ち出した「国民的社会的解放綱領」(「ドイツ人民の民族的(国民的)・社会的解放のための綱領的宣言」一九三〇年八月)を念頭に置きながら、「今日、独立して存在する資本主義諸国の勤労者の、社会的解放の闘争は、多かれ少かれ、何等かの関係に於て、民族的——国民的解放の闘争綱領に、社会的解放の綱領を結合せしめてこそ、生きた変革となる」(二〇九頁)と述べる。前手記と同じく、民族と階級の「生きた統一」も考えられたが、内容が若干変化し、「抑圧」に関する以下の項目が付け加えられたことは興味深い。

一 民族の他民族に対する抑圧は結局階級的抑圧を意味する。それは一般的には一民族の支配者が他民族の勤労者を抑圧するを意味する。この現象は帝国主義時代に著しく、植民地半植民地の民族運動はどの時期の民族運動よりも尖锐な階級的性質を持つてゐる。諸民族の間の平等は他の平等と同じく、社会主義の成功(即ち階級の除去)の後に実現せられる。(一〇四、五頁)

また東アジアとの関係についても、「われわれは台湾朝鮮の勞苦大衆が其搾取者たる日本主義の鉄鎖を断ち切り自己を解放せんとする衝動、努力が全く正当であることを認める」（一九〇頁）、「社会主義を建設した日本と、現時のソ政府の拡大した全支那人民政府とが、日支連邦を形成するならば、アジア諸民族の運動の最も確固なる支柱」（一四一頁）と述べ、かつてのアジア的停滞性論が相対化された。

つまり、彼らは自分たちの一国社会主義を、反ナチズムに舵を切ったドイツ共産党や中国共産党と関連付けながら、国内では二方面（日本共産党とファシズム）闘争に立つことを述べ、従来の「転向」声明を急進化させた。

また、一九三四年一二月には、一国社会主義運動に携わる人々によって「一国社会主義テーゼ草案」が発表された。同テーゼは「戦争の切迫」「国内改革」「ファシズムの危機」という状況下で、帝国主義とファシズムへの批判として一国社会主義を打ち出したものである。

彼らは自らの運動を反ファシズムの最前線に置きながら、一国社会主義を「ブルジョア地主の組織原則及び政策としてのファシズムに対抗し之を粉碎し得るプロレタリアを中心とする人民的国民的改革運動及組織の根本的再編制の原則政策」と定義し、実践に向けた以下の決意を表明した。

……実践的には改革を欲求する大衆とその真摯な戦争的指導者の間に急激に芽生へつゝあるプロレタリア社会主義的再組織運動を代表しその勢力を発展の基礎とするものである（一国社会主義と我々が称する）新たな改革精神とは同志佐野、鍋山、の言説そのもので終るのではなし逆にこの実際状況と動きこそは一国社会主義運動を生み、その優れた発言者を佐、鍋、を始めとする諸同志に見出したにすぎないのだ。この意味において我々はセクト主義を打破し自らの使命に生き公然大衆を動員しなければならない。

しかし、問題はこの思想をどのように社会に根付かせるかであった。同年一〇月下旬、一二月上旬に彼らは大阪、東京

で全国大会準備会を開催したが、一九三五年一月に東京で内紛が起きた。これは下獄した中尾に代わって責任者になった西村と「高山某」の意見対立で、「独立共産党的見解」（西村）か、「資本主義打壊ノ国民運動ニ結合発展ノ為ノ斗争」（高山）かを巡るものだった。しかし、獄中の佐野、鍋山が渡辺多恵子を通じて調停し、二月下旬に一度は収まった。²⁴

その後、彼らは組織の拡大に向けて、一九三五年四月に地方組織の埼玉勤労前進会から『前進』を、六月一日日には東京在住の同志（西村、河内午之助、渡辺潜（社会大衆党员））を中心に『日本政治新聞』を創刊した。²⁵

後者の「創刊之辞」では、戦争を肯定しつつも、労働者、農民に対し、資本主義の諸矛盾を解決する「国内改革」を訴え、「日本の労働者は日本の全民族の全社会的国民的利益を最も深刻に進歩的に代表し、その運命を自己の責任とする精神に立つて、真の深い階級意識の上に立つて行動」すべきという。²⁶ここでは「国社会主義」に直接言及されず、佐野、鍋山の旧来の論を脱色し、自らの運動を「反ファシズム闘争」に位置づけようとする姿勢を認めることができる。

一方で、組織内の統一は進まなかった。四月以降に獄内の三田村四郎が国社会主義運動から脱退を声明したほか、一九三五年末から再び内部対立が顕在化しはじめた。これは『日本政治新聞』の方針に対する川崎堅雄の批判に端を発するもので、西村が同人を辞した。西村は辞去声明書で、同紙が「一国社会主義の機関紙化——セクト化の傾向を生ずると共に、デマや逆宣伝に対して積極的に戦つてゐないし、他党派に対する批判を遠感（慮）する中途半端な傾向を辿り、又実際上も闘争と僅かな結合しかなし得なかつた」と自己批判する。²⁷

この批判を受けて、同人の河内午之助は『日本政治新聞』の編集方針として一国社会主義の機関紙ではなく、「日本の勤労人民運動の成長と勝利」を目指すとしたが、「思想的、政治的団体の利己的統一戦術に立脚してはならない」として運動の提携には慎重だった。²⁸同紙は二・二六事件（一九三六年二月）の余波を受け、同月末以降に廃刊となる。

実践運動の方も、総選挙で躍進を遂げた社会大衆党の前に存在意義が薄れていく中で、自然消滅へと至った。その後も一国社会主義運動は一部で継続されるが、当局から見れば、一国社会主義は「絶対に放置し得ざるもの」、共産主義運動の「時代的紛装」であった。²⁹

二 東アジアへの動員

(一) 階級から民族へ

一九三〇年代半ば以降、当局の思想犯対策は転機を迎えた。これは検挙が一段落し、保釈、執行猶予対象者の処遇が焦点となったためである。出所後の就職難が彼らを再犯へ導くことが懸念され、対策が求められた。いわば「検挙時代」から「社会復帰時代」への転換である。³⁰ 司法省は一九三六年五月に思想犯保護観察法を公布し（同年一月施行）、司法保護事業連盟による保護観察事業の統括、保護観察団体への思想犯登録と就職斡旋、「思想善導」に取り組んでいく。

その矢先に起きたのが日中戦争（一九三七年七月）だった。獄中で開戦の報を受け取った佐野、鍋山は当局から手記作成を求められ、鍋山は「最近の我が思想的内省に就て」（七月三〇日付）を、佐野は「最近の心境について」（八月一日付）を提出した。³¹ 「転向」から四年の歳月は、彼らに思想上の変化をもたらしていた。

佐野における一つ目の変化は「民族」に対する見解である。かつては「二者（民族と階級）はいはゞ等値なる対立的モメントであつて、交互作用をする」と解したが、ここでは「民族」が階級に優越するとされた。

また、二つ目の変化として資本主義変革に対する態度がある。一国社会主義が目指した資本主義の変革が修正に変えられることで、社会主義の部分が弱まり、一国社会主義が「国民主義」に置き換えられた。「国民主義」とは「内には自由主義的資本主義の害悪を除去して社会を新しい発展段階に押し上げ、外には尖鋭なる国家対立に自己を優越せしめる基本的動力」のことである。手記末尾には、出獄後は「国民主義」を基礎とした合法社会運動や日中戦争における反乱工作に従事したいという希望も記された。

鍋山も手記冒頭で「転向当初に比して著しく異つた自己を見出す」と述べ、もはや「一国社会主義」に言及せず、「皇室中心主義」への「深化」を明らかにする。この皇室中心主義を「我が民族精神の中樞」とし、「民族が発展せんとする自己拡張運動には必ず戦争が不可避」と述べ、戦時下にあつていかに「民族」に発展をもたらすかを考える。

これ以外に注目される変化として中国共産党に関する部分がある。かつて「共産軍に一定の価値を認めた」鍋山は、ここではその態度を改めた。一方で彼らの存在によつて「つひに民族的利害が階級的利害に優位することの証明がなされた」として「これは共産党そのものの転向」と述べ、世界の共産主義運動の動向から自らの「転向」の正しさを主張した。最後に鍋山は、コミンテルン、ソ連、中国との「内部的な実践活動」の経験を活かし、「日本精神に立返り合法的に出直したい」という「将来の方針」を述べた。

のちに二人の手記は、内閣情報部が主催する思想展覧会（一九三八年二月九日、高島屋）で「転向」声明とともに出品された。また、佐野手記とほぼ同内容の「獄中記 支那事変に寄す」が『文藝春秋』一九三七年二月月号に掲載され、国民の「思想善導」に用いられた。

（二） 「対支工作」の提言

日中戦争は佐野、鍋山のみならず、他の「転向者」の処遇にも影響を与えた。当局は、占領地域での宣撫工作、文化開発工作、日本軍慰問などに「優秀転向者」を派遣する一方で、「思想国防」のため国内の「転向者」を動員した。[※]実際、就職難にあえぐ「転向者」は保護観察所から斡旋された大陸の就職先に赴くことを余儀なくされた。[※]この中には一国会主義運動に関わつた人々も含まれていた。[※]

多くの「転向者」が大陸に移るなか、獄中の佐野、鍋山も「対支工作」に関心を移した。宇田尚（東洋女子歯科医学専門学校校長）[※]に宛てた彼らの意見書が宇多の『対支文化工作草案』（改造社、一九三九年四月）に掲載された。異例の形式での発表だが、宇田は平田勲（元検事、当時思想犯担当）を介して佐野、鍋山と交流し始め、司法保護事業にも関与した人物だった。各意見書のタイトルを並べれば次のようになる。

佐野「北支新国家の指導精神及び思想工作に就て」（一九三八年三月一八日付）

佐野「無題」(一九三八年八月五日付)

佐野「東亜協同体に就ての二三の私見」(一九三九年一月三一日付)

鍋山「北京新政府の文教政策に就て」(一九三八年三月一五日付)

鍋山「支那事変とアジアの解放」(同年八月三日付)

鍋山「東亜協同体と思想闘争 特に組織問題」(一九三九年一月二九日付)

佐野の第一信では、日本が占領した「北支新国家」の指導精神と工作内容が体系的に述べられた。佐野の中では「支那人の自治能力」への信頼は薄く、日本による開発や「皇道精神」啓蒙の重要性が語られる。それゆえに、出来上がった新国家は「日本を中心(いはゆる盟主)」とする大陸的国家構造たる汎極東同盟の一構成員「でなければならぬ」。

第二信では、自由主義、共産主義的視点からの中国問題の把握を批判し、自らが拠る「国民主義」に基いてこの問題を把握すべきだとする。その上で、中国にも「国民主義」を原則とする新国家を樹立させ、日本が指導権を握る「日支連邦」を実現すべきことを訴えた。

第三信で東亜協同体論を批評する佐野は、東亜協同体論の基礎精神を「新東洋主義」(新東洋精神)と名付ける。その内容は「アジア人のアジア。反西洋的」「協同体制社会構造の建設。反資本主義的」「国家第一。国民主義」などから構成されるが、中心にはやはり「皇道主義」(日本精神)がなければならぬ。この「新東洋精神」が政治的実践的に把握されると「汎アジア主義」になる。「転向」時の佐野の中では一国社会主義と汎アジア主義は表裏一体だったが、前者の閉塞とともに、後者が再び頭をもたげた形となった。

一方で、この汎アジア主義の負の側面が相対化されたのが鍋山の意見書である。冒頭から、彼は世上の「北支開発論」を「日本による支那の経済搾取に外ならぬことを……支那人は受取る」と牽制し、日中戦争に「道義的意義」がないならば「率直にこれを、帝国主義的侵略なりと闡明するの外ない」と述べる。この戦争に「道義」を与えるためには、中国を

近代国家たらしめる「社会変革」と中国の民心刷新という「文化維新」がなければならぬと彼は言う。後者の眼目には「日本の皇道国体が有つ世界的意義の深き認識」や「日本を中心とするアジア大連邦建設の翹望」なども含まれ、日本主導の変革が想定されたことは確かである。

しかし、これとは別に、鍋山は日本のジャーナリズムに溢れる中国人に対する民族蔑視論を批判しただけでなく、日本や「日本精神」に対峙する姿勢も持ち合わせていた。これは「今次の事変（日中戦争）は洵に、誤れる支那を覚醒せしむるのみならず、日本自体の誤れる觀念をも覚醒せしめんとする悲劇」という一文に表れている。

こうした彼の論の背後には「日本はアジアの前衛として、アジア解放の為に荆棘の道を進むべき使命を負ふてゐる」という思考があり、日本が現状に近い姿でアジアの中心たるべきことが語られる佐野の論とは異質だった。また鍋山は、東亞協同体の実現には「組織」が必要と述べ、その組織を政治的かつ「高度に行動的」で、「大衆と密接な結合を保つ前衛の組織」であるべきとする。

とくに、「日満支」以外に外周の諸民族も参加することを視野に入れ、そのための「思想宣伝」に言及するが、ここでも「甘言を以て人心を釣ることが宣伝だと思ふのは、致命的な誤謬」という警鐘を忘れていない。しかし、鍋山が一番強調するのは日本国内での政治変革だった。彼は「満支何れに見るよりも一層強固に一国一党的でなければ、外周諸民族はいふも愚か、満支の民衆をすら信服せしむることが不可能」として、今後の日本を試した。

(三) 「転向」の広域化

佐野、鍋山の意見書公開は思わぬ波紋を広げ、鍋山の回想によれば、「刑執行中の者のそれを、みだりに発表したのが、けしからんという理由」[※]で物議を醸したという。

佐野の場合も同様だった。彼は、前掲意見書で「満洲には左翼くづれ多し」として「内地」の外までも思想統制を要求する。また、新聞『日本』に掲載された佐野の宇田宛意見書でも「左翼前歴者」を抱える満鉄調査部が国策を遂行できる

のかといった批判を繰り返したという。⁸³これら佐野の「告発」が後年の満鉄調査部事件の遠因になったと石堂清倫は事あるごとに回想する。⁸⁴

戦時下での「転向」は朝鮮まで波及し、当地の「転向者」と佐野、鍋山との交流を生んだ。独立運動家から内鮮一体論者に転じた朴熙道が『東洋之光』を一九三九年一月に創刊する。その目的は「新日本主義の下に内鮮一体となり、内地人と朝鮮人が、通古斯的な意味に於ける新日本民族として統一結合されること」⁸⁵であった。

全鮮思想報国連盟の朴得鉉に宛てた佐野、鍋山の手紙が朴の許可を得て『東亜之光』に転載されたのは同年一〇月頃である。「大兄らは恵まれてゐる」(一九三九年一〇月号)と題する私信で、鍋山は「内地」において「転向者を働かせやうと云ふよりも抑えようと云ふ意欲の方が強い」ことに不満であり、朝鮮における「転向者」の活用を称賛し、かつ羨ましいと述べる。彼は「過去の運動」(共産主義運動)において「内鮮両人が互に聊かの差別感を持たず、相信相敬して同一目標に突進した経験は限りなく貴うとい」としながら、間違つた思想ではなく「内鮮一体の大日本の見地」の観点からなされるべきだという。

他方の佐野も「内鮮一体の三大思想的眼目」(同年一二月号)で、内鮮一体運動における「眼目」として「天皇へ帰一し奉ること」「国家第一の思想に徹すること」「敬神」を挙げ、これらを「興亜的国民主義」として東亜協同体の基礎原理としなければならぬと述べた。こうして佐野、鍋山の「転向」は戦時下でもさまざまな波紋と共鳴を広げていった。一九四一年一二月には太平洋戦争が始まり、彼らは再び獄中で開戦の報を受け取った。

二 懺悔道と大陸行

(一) 自己批判の先に

一九四三年一〇月、佐野、鍋山の出所が間近に迫るなかで、予防拘禁の対象とすかどうかが問題となる。検事は、彼

らを面接した結果、「両名共既ニ共產主義思想ヲ清算シ進ンデ如何ニシテ皇国臣民トシテノ臣道実践ヲ為シ得ベキカヲ現在ニ於ケル最大ノ関心事ナリトスル心境ノ吐露ハ全ク虚偽ノモノニアラザルコトヲ知ル」との感触を得、彼らに手記を提出することを命じた。以下が二人の手記である。

佐野「心のと　　転向声明以後」(一九四三年四月)

佐野「信念の事項二、三　手記「心のと」補遺」(同年七月二五日)

佐野「生活、研究、家情、交友について」(同年七月二五日)

「鍋山貞親手記」(同年七月二五日) 〆

佐野の手記はこれまでとは内容が一変している。「この数年来政治に関する関心が冷却し、世界観的哲學的問題の解決を自ら切実に要求してゐる」ため、親鸞の影響による贖罪論と今泉定助、寛克彦の影響による皇道主義が合わさった宗教的な色彩の濃いものになった。

手記の中で佐野が批判するのは「西洋的なもの」であり、この地点からの「転向」が再考された。それゆえに、「転向」とは「自己の悪逆な罪悪を懺悔し深痛なる自己否定を約した者が、禊祓の力によつて新しい確信を得て(いな与へられて)日本人として全く新しく生れ変わる事」になる。「悪逆な罪悪」とは共產主義者であつたこと、「禊祓」とは「私に巣ふ一切の私を断滅して、民族の頭部であり日本国家そのものであらせられる天皇へ一身を捧げ奉ること」であつた。この過程において神、祖国、「大御心」を内体験し、その慈悲によつて日本人として生まれかわるといふのである。

他方の鍋山は、自身の半生を振り返りながら、「転向」以前と以後に分けて心境を綴つた。彼もまた「転向」を「深い自己批判」においてなされるべきとし、「異邦的な殻を一切脱ぎ捨てて真裸の日本人たる心身を回復すること」こそ「真の転向」だといふ。しかし、それは自分の外に道を求めて実現するのではなく、「拙く醜き己れ自身が　陛下の御仁慈に

よつて生かされてゐることの直観的自覚を媒介して掴まるべき信念」と述べる。

ともに自己批判と天皇による救いを説いた二人だが、出獄後の進路は異なつていた。佐野は手記の中で「世間的活動の意欲」なく運動の一線から退いて、東洋史及び日本古代精神研究に専念すると述べた。鍋山は「支那もしくは南方」で軍、官庁、半官庁で特殊な仕事に就き、積極的に東アジア政策に関わることを希望した。

(二) 「敗戦処理」の行方

一九四三年一〇月に出獄した二人を待つていたのは戸惑いと生活難だった。依然として当局の監視は続き、保護観察仮処分の対象になる。五二歳の佐野は就職難と糖尿病に苦しめられながら入院と療養を繰り返したとされ、敗戦までの足取りは本人の回想や手記以外ほとんどわかつていない。⁵⁴

出獄から二か月後、佐野は当局に「我が獄中の思想遍歴」という手記を提出した。これは獄中から出獄後までの思想をまとめたもので、一国社会主義は「旧来の階級主義の一変形」「スターリンの考へ方の影響を脱し切れなかつた」「鮮台満を日本と対等とするかの如き用語は間違」⁵⁵などと総括された。むしろ、出獄直前と同じ天皇崇拜論が「むすび」で展開され、自らの生まれ変わりは「我が民族の根元神たる天照大神であり、その後裔たる現人神天皇」の「一大慈悲」によつて成し遂げられたとした。⁵⁶

出獄時の鍋山は四二歳で、妻が身元引受人になつた。就職希望を当局に伝えていた彼の元に一九四四年一月、北支那開發株式会社副總裁の津田秀栄、日本航空機の矢野範二から就職の誘いがあつた（津田、矢野とも保護観察事業に関与）。

鍋山は日本航空機に入社するが、ひと月も経たずに退社した。これは、「キミ、ぼくらはどうせ堅気なサラリーマンになり切れないんだぜ」⁵⁷という矢次二夫（国策研究会幹部）の一言に心を揺さぶられたためである。

彼の紹介で、鍋山は東亜政策の重鎮である大蔵公望と面会した。大蔵の日記（一九四四年六月二四日条）に「鈴木一郎」と変名した鍋山が登場する。

一時、矢次一夫君の紹介で鍋山貞親（鈴木一郎と仮名）来訪。鍋山は我國の最も著名な共産主義者だったのが十五年の刑をうけた後に転向、目下参謀本部嘱托となつて支那の中国共産党対策の研究をしている趣なり。相当に利用出来る人と思ひ且つ参謀本部嘱托の肩書に稍々安心して一ヶ年五千元の報酬（二年契約）で左の四項の調査を依頼した。

一、日本の青少年練成及教育改革案

二、戦後に於る我國の經濟機構案

三、日本のとる可き民族政策

四、大東亜宣言を基本とする大東亜各国に共通す可き論理的原理の構成⁵⁶

鍋山と軍との関係は戦後に告発されるが、こうした資料から垣間見えるのは、軍、官界有力者の支援を受けて国策と協力していく彼の姿である。鍋山は一九四四年二月以降二度中国へ旅行するが、⁵⁷右記引用に基づくなら「中国共産党対策」の可能性が高い。中国における鍋山の活動について、岡崎次郎（満鉄総務局調査役）は次のように回想している。

鍋山貞親とも氏野博光の紹介で知り合いになった。彼がいつごろから北京にきていたのかは聞きもしなかった。北支派遣軍司令部の嘱托として八路軍（中共軍）捕虜の教育、つまり洗脳の任に当たり、相当な成果を挙げているとの話は聞いていた。教育とは、中国兵士を改心させて諜報活動をさせるということであるが、その成果が挙げたというのは信用できない。⁴⁷

同時期の中国延安において野坂参三が捕虜の日本兵に共産主義教育を施していたことはよく知られているが、日本軍としても何らかの対策が必要となり、「転向者」の鍋山に白羽の矢が立ったと考えられる。

しかし、国策に加担する姿が垣間見える一方で、別の姿も描かれていた。富塚清（東大工学部教授、航空エンジン開発研究者）の日記（抜粋）には一時富塚家に居候した鍋山の動静が記述されている。一九四四年八月八日条には「鍋山君の現在の職業は、軍や大東亜省の顧問のようなことらしい」とあり、在宅して「戦後の日本の処分問題」に関する極秘書類を見る彼の姿が描かれている。また、八月一日にはスターリンへの言及もある。

八月一日 朝、鍋山君と話す。

「日本の敗戦後、ロシヤのスターリンは日本を助けるかも知れぬと思うが、どうだろうか？」と尋ねてみる。鍋山君もそうした希望的観測は持っているとのこと。しかし、それがうまく行くためには、手をこまねいているだけではだめです。手を打たねばだめだと。しかしまだ全然、何もやっていない。「そのときになってからでは困ると思うんですがね……」云々。また彼はいう。

「英米方は始めから戦後処理を研究しているが、日本はそうしたことを何もしていない。目前のことばかり考えているが、これでは完勝してもあと始末が大変。そのやりそこないで戦果を全部失うかも知れず、また、国家そのもののがらがらになるかも知れぬ。日本の軍人はもとより政治家も短見で心細い限りである」と、まことに同感。

日記の彼は、すでに敗戦を見越してスターリンの助力に期待し、そのために「手を打」つことを述べる。一月に中国から帰国した鍋山は、富塚に中国やソ連の情勢、軍の状況認識を率直に語ったが、同月以降は日記に登場しなくなる。

この日記には、受身で軍の片棒を担がされたというよりは、戦時下でも時局を積極的に変革しようとする鍋山の姿がある。彼は一九四五年二月に妻とともに北京に移り住むが、この目的が「中国共産党対策」のためだったか、日本の敗戦を見越したソ連との交渉のためだったかは定かではない。しかし、後者の道は、ソ連の対日参戦（同年八月）によって絶たれた。大日本帝国がポツダム宣言を受諾したのはそれから数日後のことである。

四 一 国社会主義運動の再建

(一) 共産主義の「日本化」

獄中で「非転向」を貫いたという徳田球一、志賀義雄らが釈放されたのは敗戦から二か月後のことだった。徳田は、二月の第四回党大会後、党書記長に就任する。翌年一月には延安に亡命していた野坂参三がソ連経由で帰国し、共産党に迎えられた。彼が打ち出した愛される共産党論、人民政府樹立論はその後党の方針として位置づけられていく。

社会党は一九四五年一月に片山哲を書記長として結成された。この結成大会への出席を佐野は水谷長三郎から勧誘されたが、所用により参加できず、甥の佐野博が代理で出席した。すでに敗戦前の天皇崇拜論を振り捨てていた佐野は、「日本革命の基本動向は民主々義を徹底して社会主義に到達するにある」³⁾などと述べ、「革新」政党への提言を全国紙や雑誌に精力的に発表した。

一九四六年四月からは早稲田大学で教鞭を執りながら、『解説・日本革命』（一九四六年四月、時局月報社）、『民族と社会主義』（一九四六年八月、協同出版社）、『民族と民主主義』（一九四七年四月、九州書院）を立て続けに発表した。

この時期の佐野が取り組んだのは一国社会主義論と、「階級」と「民族」の問題であった。いずれも戦前の『日本共産党及コミンタールン批判』（一九三四年七月）と基本的な枠組みは変わっていないが、⁴⁾変化した点は天皇論と自民族優越論である。前者は天皇私有財産の国家返還と天皇自身が社会主義の信奉者になるべきとされ、後者は日本を指した「優劣なる民族」という言葉が「活動的民族」に置き換えられた。

なかでも特に大きな変化を『民族と民主主義』に認めることができる。戦後すぐに、佐野は封建勢力打倒の二段階革命（民主主義から社会主義へ）を語っているが、同著ではこれが毛沢東の新民主主義論の影響であることが明らかにされる。佐野は「ブルジョア民主々義」（英米）でも、「プロレタリア民主々義」（ソ連）でもない「中共の首領毛沢東の主張する新民主々義や、ソ連周辺の国々で現に実行されつゝあるいはゆるバルカン・デモクラシーの型」（二六頁）に期待した。

そして、「第三の型に属すると信じる」日本の民主革命実現において、毛沢東による「マルクス、レーニン主義の支那化」と同じように、「その徹底的な日本化」に努めるべきとした（一七、二七頁）。

また、毛沢東への傾倒は、戦術面でも反映された。同著では、「民主的統一戦線」について多くの頁数が割かれたが、佐野はこの参照例として、コミンテルンの人民戦線よりも中国の抗日統一戦線を挙げる。そして、この統一戦線が成立するためとして、「都市、農村、工場の下からの民主化運動が人民委員会や諸種の組合等の人民組織の形態を通じて起らねばならぬこと、第二は全運動を指導し得る国民的前衛の党が、成立せねばならぬこと」（五七頁）を重視した。

（二） 労農前衛党

佐野は一九四五年一〇月頃から一国社会主義運動の再建に動き出す。³²翌月、一国社会主義者同盟結成を發表し、³³翌年二月に日本民主前衛同盟を結成した。佐野、風間丈吉を中心にかつての一国社会主義運動家が集まった。

その『宣言・綱領・規約』（同年二月）では、「将来の全国的前衛政党组成の推進体」として同盟が位置づけられ、統一戦線実現に向けて共産党との提携も考えられた。実際、秋山清の証言では、同年春頃に佐野から共産党へ復党交渉が行われたという。³⁴しかし、交渉は失敗し、五月頃から『前衛』などで佐野批判が展開され、彼の思惑通りに進んでいない。一九四六年八月頃、日本民主前衛同盟が発展する形で、労農前衛党準備会が結成された。³⁵「綱領草案」では「日本革命の基本方向」として上からの「ブルジョアの民主主義」ではなく、下からの「民主革命」が提唱され、封建的社会体制の掃討、金融資本、大産業資本、独占的大資本家の支配を排除することが挙げられた。この革命を担う勢力は「全国的前衛党」と「人民委員会」（労働者、農民の同盟を基盤）であり、議会と並列しながら「社会主義的世界国家建設」を目指す、まずは日本の一国社会主義の実現が目標になる。³⁶

翌九月には準備会機関紙として『労農新聞』（日本民主前衛同盟機関誌『前衛ニュース』改題）が発行された。³⁷創刊号では一国社会主義を前面に出さずに、生活問題、労働問題など大衆との関係を構築することに力点が置かれた。講演な

どによる地方組織拡大に努めながら、一〇月初旬までに中央常任委員会を九回開催したほか、一二月には拡大中央委員会を開いた。中央委員会で問題になったのは結党時期で、最終的に本部の意向が通り、年明け一月下旬ないし二月初旬に決まる。⁸²

実際の結党式は一九四七年三月九日に行われ、ここで規約、綱領の制定、また佐野学が中央委員長、風間丈吉が書記長に就任した。⁸³三月に結成されたのは、第二三回総選挙（四月二五日）を見越したものだ。結党が報告された機関誌には、「我党の選挙政策」と第一次公認候補（風間丈吉、佐野博ら一四名）のプロフィールが掲載されたほか、同時期に選挙用の党パンフレットが発行された。

同パンフでは、他党との関係が書かれ、社会党に対しては「民主革命の有力部隊」になれば「この党と共同の戦列に立ち得る」と選挙後の提携を含みを持たした。一方の共産党に対しては「昭和二十一年初頭以来急角度の転向に着手し、愛国と民族の語をしん用し、我党の一国社会主義理論を盗用するに到っている」と批判した。⁸⁴

もつとも、提携以前に選挙の結果は惨敗で、誰一人当選していない。総選挙では社会党が一四〇数名を得て第一党になるが、共産党でも社会党でもない労農前衛党はその間に埋没した形となった。

選挙以後の党活動は、紙の入手難によって機関紙が休刊したため不明な点が多いが、『労農』同年七月二五日号（労農党本部発行、責任者風間丈吉）によれば、党拡大中央委員会（七月二二日開催）で重要なことが決議された。ひとつは党名から「前衛」を削ること、もうひとつは佐野学委員長の辞任であった。彼はこの理由を次のように言う。

私は党の前身たる民主前衛同盟以来、諸君と困難を共にし、党創立に際しては委員長職を与へられたのであったが、今春以来、持病再発して病褥に在る日が多く、党務に十分尽くすことができず、殊に諸君のお勧めにもかゝらず参議院選挙に立候補できず、ひいて党の拡大にも支障を生じたことに責任を感じ深くおわびするところである。去る五月の党代表者会議は正式の大会又は拡大中央委員会でなかつたが、全国的重要代表者が参集し、ほぼ党内の主要意向を代表

するものであつた。その席上で私が委員長長の地位より退き党外で思想的仕事に専心して私の能力を生かしてゆく方がよいと云ふ大多数諸君の意志表示があつた。²¹

その後、同党は風間丈吉を中心に党の立て直しを進め、九月には「日本労農党（略称労農党）」に改称したが、その後の活動は不明な点が多い。²²

(三) 日本政治研究所

党委員長辞任後の佐野は、日本政治研究所で活動した。研究所設立の話が持ちあがつたのは五月中旬である。佐野の訪問を受けた矢部貞治は、「用件は社会党の中間派の三輪寿壮、河野密、松本淳三などの人々が政策の研究会を作りたいと言ふので参加して貰へまいかといふことで、中間派は民族の立場に立つて、将来は新しい第三勢力を目ざしてゐるといふこと」を日記（五月一七日条）に書きとめてゐる。²³

三輪、河野、矢部とも東京帝大出身、三輪、河野は新人会出身で社会思想社を経て日本労農党に所属していた。松本も日本労農党出身である。佐野も新人会出身だったことから、これらの旧縁を基礎として新組織樹立の話が進んだ。五月下旬には片山哲社会党連立内閣が誕生するが、党内左派への牽制と中間派拡大の布石として研究所結成が試みられ、その中心に佐野が担がれた。

六月に規約の協議や発令式、創立相談会を経て、七月八日に創立総会が開かれた。「日本政治研究所 趣旨と規約」によれば、「日本の現実そのものから教訓を汲みとつて、日本に最も適切なる社会主義の理論と政策を研究しこれを実践の武器たらしむる」²⁴ことが目的で、研究会開催、研究成果発表、講演会などが主な事業だった。

理事には伊藤武雄、波多野鼎、河井栄蔵、川野重任、高宮晋、豎山利忠、鍋山貞親、武野武治、大河内一男、矢部貞治、山名義鶴、草野文男、松方義三郎、松本淳三、小松清、赤松常子、斎藤精鉅、佐野学、菊川忠雄、水野成夫、美濃部洋次、

清水一繼、平野学らが就いた。

ここには設立の話を持ちかけたという三輪寿壯、河野密の名はないが、六月二日の創立相談会には兩名とも参加した。相談会では、鍋山から、新聞報道では研究所が社会党と関係があり、実際社会党関係者も参加したが、一貫した態度でやつてもらいたいとし、佐野も超党派的な研究機関でありたいと述べた。⁸⁹

しかし実際は、社会党関係者が多く参加し、佐野も社会党に期待を寄せたことは明らかだった。また、鍋山、水野、豎山らの「転向者」、北京時代から鍋山と活動を共にする草野、これ以外に社会政策学者の大河内、元「革新官僚」の美濃部、後述する経済学者の波多野なども参加した。

五 労働民主化運動の支援

(一) 北京の民主策進研究会

鍋山は、北京で敗戦を迎えたあと、廬豊年隊長率いる河北挺身隊に保護された。この時保護された日本人は鍋山、鈴木重二（東洋紡幹部）ら七名のみで、国民政府から重視されていたことがわかる。

鍋山の北京時代を記録した一次資料はないが、杉之原舜一（マルクス主義法学、「転向」後、満鉄調査部を経て北支那開発株式会社に在籍し北京で華北調査に従事、敗戦後は北京の新聞社勤務）の回想に鍋山が登場する。杉之原は一九四六年二月か三月頃に急遽国民政府から北京退去を命ぜられるが、この処遇に鍋山が関与したという。

日本へ帰ってから、外務省の草野〔文男〕氏にあつたとき、彼は「なぜあなたが、国民党政府から追放を命じられたか、わかりますか」と言つた。こちらは、全然知らなかつたので、きいてみると、当時、鍋山貞親が北京におり、かれが、国民党の政府当局にとりいって、共産主義者、左翼の追放の人選をやつたのだという。⁹⁰

これが事実なら、「転向者」杉之原と中国共産党の関係を疑われたのだろうか、鍋山の自伝にはむろん記されていない。当の鍋山も「転向者」のためアメリカ戦略諜報局（OSS）に警戒されたことが船橋破魔雄（北支那開発株式会社勤務）の回想にある。帰国が決まった船橋は、一九四六年四月下旬に北京を発つて天津の居留地にとどまるが、天津出発の日にOSSから呼び出しを受けた。最初の訊問は杉之原に関するもの、次が「鈴木一郎」こと鍋山貞親に関するものだった。

……第二の質問は、鈴木一郎との関係であった。この方の質問は詳細を極め、何月何日に鈴木と石本宅で会っているが、どんな話をしたのかとまで、O・S・Sの牒「諜」報網の適確さを示していた。私は、厚顔な鈴木マヤのイヤらしい目つきを思い浮べて、無性に癪に障つて来た。それに出帆の時刻が迫つた来たのだ。アメリカ人は、そんな私の心中には頓着なく、詳細な調査データに従つて、次から次へと質問して来るのであった。

私が共産党員でもなく、シンパでもないことがやつと分つてくれたとき、もう出帆時刻を過ぎていた。

船橋は、杉之原の助手として敗戦後の北支開発と在留日本人の財産処理問題をまとめた経緯があり、それが杉之原に関する訊問となった。「鈴木」の正体を船橋は知らなかった。引用文中の「石本」とは北京在住の男爵石本恵吉のことで、彼の世話になった船橋は、彼から毛沢東との和平交渉の手伝いを依頼されたが延期になったという。

その鍋山はすぐに帰国とはならず、一九四五年一〇月頃、北京で民主主義の研究を行う民主策進研究会を結成した。最初の会合は鈴木重二宅で開かれた。北京在住の日本人が略奪の対象になるなか、こうした会合を自由に開くことができずたのは何応欽や盧豊年の庇護下にあつたからである。

参加者は石田英一郎（西北研究所次長）、鷺谷嘉兵衛（蒙疆学院教官）、宮崎菊次、全先喬、草野文男（外務省嘱託）、氏野博光、藤原英夫（輔仁大学教員）、竹田淳照、日高魁、岡崎次郎、鈴木重二、石本恵吉である。また、

研究会への参加は確認できなかったが、鍋山宅に出入りしていた人物に国松文雄（華北綜合調査研究所員）や山口隆一（同上、のち毛沢東暗殺未遂事件で処刑）がいた。『同時期の北京における日本人交流を藤原が次のように回想する。

たしか兄（氏野博光）から石本恵吉男爵に紹介され、（一九四五年）七月に入ると同氏のきも入りで敗戦処理準備の有志の会合が開かれるようになり、そこで兄と一、二度顔をあわせることがあった。しかし、交友関係が成立したのは、その年の秋もふけてからだだった。ふとしたことで八月下旬から「青年同志会」と呼ぶ団体の結成に参加し、その代表にされ、抑留生活期間の日僑の徹底的な相互扶助を目標に「怪文書」配布まで主宰したが、秋に覆面をぬいで、「日僑自治会」結成参加に運動をしぼった頃から、幹部の一人柴崎氏を介して氏野兄の積極的な後援を得ることになった。年末に独身・单身男子優先帰国の措置があつて同志会は解散したが、年があけると、友人看病のため帰国を延期したわたしは、氏野兄らから誘われて、会のもうひとりの幹部だった竹田氏（淳照）と三人で、鍋山貞親氏を囲む民主主義研究を目ざす会合の世話役として同労することになった。（鍋山氏には、宮崎邸食客のころ一度「鈴木氏」として紹介され拝顔したことがあつたが、この会合で何回か指教を受けることができた。）²⁴

北京に來た日本人の結節点になつたのが石本であつた。男爵でありながら、過去に片山潜との交友、加藤シヅエの前夫という特異な経歴を持つ彼は、敗戦後の北京では別の顔も持っていた。軍の諜報活動に携わっていた中島辰次郎の回想によれば、石本は国民政府の「中国国防部第二庁北京辦事処」（元國際問題研究所）に所属しながら、他方で日高富明元大佐を中心とする「北京OSS日高機関」にも所属し、米軍の資金援助を受けながら諜報活動の一端を担っていたが、のち国民政府によつて逮捕、日本に強制送還されたという。²⁵

石本も含めて民主策進研究会とその周辺はいまだ謎が多いが、引揚者が増えるにつれ、参加者も減り、会は打ち止めになつたと思われる。

(二) 世界民主研究所

鍋山自身も一九四六年六月末に北京を発ち、八月一日に帰国した。帰京後の彼は、中国共産党やソ連関係の論稿を雑誌に発表しようとしたが、占領軍の検閲で果たせなかつた。このため身近な知り合いを集めて国内外の状況を語り合う「新作講話会」を作ったことが内務省の記録（一九四七年二月一三日付）にはある。⁸⁰

この頃の鍋山は実践活動とは距離を置き、日本労働組合総同盟（総同盟）への参加（松岡駒吉から勧誘）や、旧縁の深い佐野学、風間丈吉らの労農前衛党入党も断つた。ただし、その後は、佐野の日本政治研究所（同年七月設立、のち日本政治経済研究所）や三西会に参加した。後者は公職追放中の矢次一夫を中心に政党分析を話し合う会で、矢次、鍋山、平野学、三輪寿壯、山名義鶴、矢部貞治、古沢磯次郎らが参加した。

これとほぼ同時期の九月前後に、鍋山を中心に世界民主研究所（世民研）が設立された。これが北京の民主策進研究会の後継となる。しかし、メンバーで重なるのは鍋山、草野文男、鈴木重二くらいで、日本政治研究所や三西会メンバーとの重複が多い。

一〇月一日開催の研究会では、鍋山、草野、矢部のほか、渡瀬亮輔、田中香苗、今井武夫、尾形昭二、堅山利忠らが来た。⁸¹「規約」（一九四八年一二月付）にある「同人」には大野信三、金正米吉、川崎堅雄、神林知雄、堅山、鍋山、草野、矢部の名があるが、⁸²中心的なメンバーは北京以来の鍋山と草野、そして矢部だろう。戦時中の矢部は東京帝大に勤めながら近衛文麿のブレイントラスト昭和研究会で活躍したが、敗戦後は東大を辞し、文筆業で生計を立てていた。昭和研究会に同じく参加した京都学派の高山岩男も矢部の関係で世民研と関わった。

のち代表理事に鍋山貞親、常任理事に矢部貞治、大野信三、草野文男、風間丈吉（兼事務局長）、理事に川崎堅雄、堅山利忠、神林知雄、常任幹事は山名義鶴、監事は金正米吉に決まる。⁸³縁の下から研究所を支えたのが山名で、彼を通じて進藤竹次郎（東洋紡幹部）や金正の支援を得たという。⁸⁴

「各民主主義国の歴史、諸制度、文化および諸業績を研究し、わが国の諸条件に最適する民主主義の体系化に寄与する」

という目的のもと、研究報告発行と懇談会、出張講演などが研究所の事業であり、一九五〇年一月から『主張と解説』を発行した。⁸²

これらの活動は日本政治研究所とよく似ているが、佐野が社会党中間派と結び付いたのに対し、鍋山は労組（総同盟、国鉄など）との関係も深めたことが特徴である。世民研は少人数の研究団体だが、社会党や総同盟と接近することで、片山、芦田内閣下で党内野党化する社会党左派の牽制と凋落する同党右派、中間派を支える役割を果たす。

(三) 独立青年同盟問題

一九四〇年代後半の鍋山は、戦後日本の「革命」を構想しながら、共産党批判と労働組合民主化運動に取り組んだ。

占領軍の諸改革を「横からの革命」と批判する彼は、⁸³下からの「民主革命」を考え、そのために民主主義は「生産的」「倫理的」「愛国的」の三つの特徴がなければならぬと言う。このうち鍋山が重要視したのが「愛国的」である。むしろ、愛国心が足りなかったから今回の戦争が起こったと言う彼は「同胞相互の生活を正しく護り合ふこと」と「他民族の国土や文化を尊重すること」が必要だとする。⁸⁴

鍋山はこうした革命の「新指導層」として傍観者や共産党幹部のような戦争反対論者ではなく、戦争が引き起こした国内の諸矛盾に触れた「戦争協力者」を重視した。⁸⁵また、一九四八年春頃から「民族独立」の文句や民主民族戦線を打ち出した共産党の方針転換を、「ソ連の利益のために、アメリカと抗争する民族独立」⁸⁶として徹底的に批判した。

一方で、労組に及ぶ共産党の影響を批判するため、鍋山は労働民主化運動に取り組んだ。当時、「民主化」には二つの意味があった。ひとつは「共産党の指導的影響に立つ労働組合が強調するところの民主主義」、もうひとつは「共産党の指導的干渉を強く排撃する労働組合が唱える民主主義」であり、鍋山はむしろ後者に立つ。⁸⁷

この動きが本格的に始まるのは一九四八年に入ってからである。同年一月、総同盟は中央委員会でも労働組合民主化運動を提唱し、共産党のフラクシオン活動による組合運営を批判する。翌月には、産別会議民主化同盟が結成されるなど各労

組で共產党に対抗する動きが生まれるが、これらを鍋山は積極的に支援した。

同年三月と五月に、伊東光太郎（東洋紡重役）の家で会合が開かれ、鍋山、山名、進藤竹次郎、矢部、大野信三、総同盟の金正、上条愛一らが集まった。ここで、「日本再建の指導勢力を形成する一環として、労働総同盟を教化する目的で、小さい研究団体を作」る話にまとまったほか、彼らはのちに総同盟幹部の講習会、総同盟地方支部への出張講演などを行った。また世民研から「労働民主シリーズ」という本を出版して労働者の「反共」教育にあたった。

けれども、社会党の地盤沈下は止まらず、党内の左右対立が表面化して、一九四八年二月に片山社会党連立内閣が退陣した。すぐに芦田均民主党連立内閣が発足するが、昭和電工事件（六月）によって一〇月に西尾末広が逮捕され、その翌日芦田内閣は総辞職した。最大の打撃は、第二四回総選挙（一九四九年一月）で社会党は議席を約三分の一に激減させ、連立内閣としても大敗北を喫したことである。

翌月に私的な会合で西尾と会った矢部は、彼から「委員長を片山にするか松岡にするかの件、社会党の立場を左にやらず、むしろ右にやるということ、日労系の復活と、社民系との協調の件、色々の幕僚として三輪氏を加えて時々談合する件、外廓にフェビアン協会風のを組織する件」（二月四日条）という話を聞いた。あえて「右に」とは、総選挙で議席を飛躍的に伸ばした共產党とその影響を警戒した発言だったと思われる。

しかし、西尾の思惑はそのままに進まなかった。党再建が話し合われた社会党第四回大会（同年四月）では委員長に片山が再任されたが、書記長選は左派の鈴木茂三郎が中間派の浅沼稻次郎を大差で破るなど左派が進出したからである。

このため七月二四日に、社会党左派とその支持組織を牽制する形で、独立青年同盟（独青）という青年団体が結成された。⁸⁸主に総同盟、国鉄民同、社会党所属の青年約二〇〇名から成り、委員長は室伏憲吾、副委員長は西村博、書記長は伊賀定盛である。大会には松岡駒吉、浅沼稻次郎、菊川忠雄、星加要、原虎一の来賓が出席し、社会党右派及び中間派、総同盟、国鉄の後援があることは明らかだった。

同盟結成準備会の「綱領（案）」には、社会主義社会の実現、ファシズムとコミュニズムとの闘争以外に、「各民族の自

主独立」に向けた闘争という項目が設けられた。このため、社会党青年部や労組から「反共の名をかる反動運動」「ファシヨ的団体」との批判が投げつけられたが、この「反動」「ファツシヨ」とは実は鍋山のことを指す。

社会党青年部の全国執行委員会（同年六月）でも「社会ファシスト鍋山一派は資本家団体である経団連と気脈を通じ反共を唯一の旗印としてその主力をわれわれの陣営に集中し最も悪質な分裂政策をろうし関西を基盤とする独立青年同盟（カシヨウ）結成の動きもまたその一端」と発表された。

それゆえに「鍋山青年団」とも揶揄された独青は、声明や『問題の焦点 独立青年同盟とは？』（一九四九年九月、独立青年同盟本部）発行によって彼の関与を否定した。しかし、独青結成大会に鍋山も出席したうえ、同じ月に「鍋山から国鉄ストの一般情勢の報告があつて、民同青年同盟を中心として政治運動をやりたいという話」（七月六日条）を矢部が聞いており、程度はともかく独青への関与は明らかだろう。

結局、独青に対する批判が高まると、総同盟すら独青排撃の決議を行った。しかし、問題はこれでおさまらず、翌年一月には独青問題をめぐって、社会党は分裂へ至る。

六 民主社会主義への結集

（一） 民族と階級の相剋

一九五〇年に入っても、鍋山は共産党批判の手を緩めていない。しかし、その共産党はコミンフォルムから野坂路線を批判され、占領軍との対決姿勢を強めた結果、六月の朝鮮戦争を前に党幹部が公職追放された。

社会党の方も独青問題で左右の対立が激化した結果、同年一月に左右両派に分裂する。このときは中間派のとりなしで四月に統一するものの、翌年一月には鈴木茂三郎が委員長に就任し、左派の指導権が確立した。さらに、同年一〇月には講和問題・安保条約締結をめぐって社会党は左右に分裂した。

こうした「革新勢力」の凋落と分裂が続くなかで、鍋山は論壇で共産党批判を展開しながら、右派社会党の支援を続けた。この時期の彼は、共産党批判をまとめて『共産党批判』（一九五〇年一二月、鹿鳴社）を出版した。その論点は多岐に亘るが、以前から着目していた共産主義と民族の關係に言及する。ユーゴ共産党のコミンフォルムからの除名（一九四八年）、中国共産党による中国建国（一九四九年）、毛沢東の「チトー化」など改めて共産主義運動と民族の關係が焦点となっていた。鍋山は次の問いを立てる。

民族と階級。これは、現代の人類が解決をせまられている二大課題である。その要素的なものだけを究めて行くと、遠く、人類の歴史を貫く二大課題だともいえる。しかし、現代はこれが、きわめて単純化されたところに特色があり、それだけ、解決の要請も切実になつて来たのである。民族と民族との利害対立を、いかに調整し解決するか。階級と階級との利害対立をいかに調整し解決するか。（八九頁）

鍋山は、日本共産党が今後「チトー化」することはないとしても、これまで党内には二つの「反逆傾向」が出てきたと言ふ。ひとつは「社会民主主義左派への移行」（一〇〇頁）で具体的には左派社会党との接近。もうひとつは「民族的な社会主義への転向」（二〇二頁）である。これは階級闘争を否定しないものの、「現実にある民族の意義を高く評価し、民族のより合理的な発展契機として階級の問題にとりくむ」（二〇一、二頁）姿勢である。「共産主義は、けつきよく、民族の問題でつまづく運命をもっている」（二〇二頁）と述べるが、これはかつての佐野や鍋山自身のことでもあった。

同じ問題を、佐野もまたこの時期に問うている。『民族と階級』（一九四九年八月、勤労時報社）で佐野は、民族を「同一の血液、同一の土地」「同一言語」「共通の社会心理と文化」「同じ政治経済体系のなかに住むこと」「勤労の組織体」（二二、二三頁）と定義するが、以前とはその内容が変化した。

とくに大きな変化は、民族が「基礎社会又は協同社会」という性格を持つとされ、「利益以前の、理知以前の、非合

理的な融和性で人々が結ばれて」いるとされたことである（二三頁）。こう佐野は解することで、民族と階級の対立を克服しようとする。彼は言う。「民族は基礎社会としてあらゆる社会結合の奥にあるものであり、階級は社会生活における最も現実的要因である。階級は民族を超越することはできない。階級の奥には民族がある。又民族の内部に階級がある」（三一頁）と。

また、佐野は、社会主義が目指す社会は「利益を中心として人間が結合するところの利益社会でなくて、人々が親和し相互愛をもつて結合するところの協同社会」であると言う。つまり、ここに「民族」と社会主義には親和性があるという論理を持ち出し、「民族を基盤とするならば、新しい協同社会としての社会主義は、一そうよくその目的を達することができる」（三五、六頁）とされた。では、国家をどのように考えるかだが、「高度の民族は必ず国家をもつ」として民族の進歩を測る基準と考えられ、「国家が徹底的に利益社会となり切れないのは国家の奥に民族がはたらいている」（三七、八頁）として、やはりその奥に民族が位置づけられた。

（二） 民主社会主義連盟

こうした佐野、鍋山の問題意識は、同時期の右派社会党の立て直しとも関わっていた。この時期新たに結成された団体に民主社会主義連盟（民社連）がある。

団体設立の話が沸き起こったのは、社会党が左右に分裂した一九五一年一〇月頃である。同月一七日に会合が開かれ、松岡駒吉、三輪寿壮、河野密、波多野鼎、赤松常子、田原春次、八木秀次、蠟山政道、矢部貞治、佐野、鍋山、三田村四郎、堅山利忠が集まった。

矢部の日記には、この会で「民主社会主義連盟というものを作ろうというので、八木、蠟山などは新しい党を作れというが、松岡の方は党内事情を心配して、文化団体ということにしたいという。一応文化的研究団体という方向でやってみようということになった」（二〇月一七日程）とある。⁹⁶つまり、右派社会党の一部を中心として来るべき新党の母体と

して結成されたのがこの民社連だった。発会式が開かれたのは二月一二日である。

「創立趣意」（一〇月二九日付）によれば、社会主義が一階級の問題ではなく、「国民と人類の問題」とされ、極めて精神的なものとして把握される。すなわち「利己心を抑制しすべての暴力の発生を防止し人間の道徳を昂めるもの」とし、この社会主義を「人間的な平和的な民主主義」を基礎としてその上に発展するべきものだという。これより、「資本家的自由主義」「共産主義の如き階級の暴力主義」「超国家主義」への批判が導き出されることになる。

この民主社会主義の目指すべき方向で特徴的なものが二つある。ひとつは、日本において「社会主義を志向する公共統制と計画経済の樹立」、もうひとつは国際連帯主義に立ちながら「アジアの後進性を打開し、その自主自立の境地を開拓すること」だったが、いずれも戦時下の統制経済論や東亜協同体論を想起させるものであった。⁵²

国外との関連では、同年六月にフランクフルトで結成された社会主義インターナショナルと「民主的社会主義」を打ち出した「宣言」に呼応しながら、国内では朝鮮戦争、米ソ冷戦という新たな戦時下において旧論が装いを新たに再登場して来たともいえる。しかも、主張だけでなく、人的にもつながっていた。

世話人は八木秀次、蟬山政道、波多野鼎で、のちに八木が会長、蟬山が理事長、波多野が事務局長になる。蟬山がかつて一九四〇年代の東亜協同体論のイデオログだったことはよく知られている。また、波多野は蟬山と同じく東大新入会出身、のち社会思想社に関わる経済学者で、一九三〇年代末から統制経済論を唱えた過去がある。波多野が佐野の日本政治研究所に関与していたことは既述の通りである。彼ら、とくに蟬山が連盟の思想的指導者であり、この民主社会主義の提唱もほかならぬ蟬山の存在が大きかった。

一九五一年一月に発行されたパンフレット『民主社会主義連盟』には波多野の「連盟と社会主義」と蟬山の「民主社会主義とは何か」が掲載された。⁵³両論で「民主社会主義」について述べられるが、波多野は社会主義をいわゆる「空想社会主義」の地点に戻そうという意識が強い。

彼は「ほんとうの社会主義」を「基本的人権があらゆる人々のために保証され、世の中のことが相互理解によつて円満

に取運ばれるそういう社会を作ろうという温かい道義的な香り高い思想」とする。それによって、「隣人愛の精神が津々浦々に漲り亘り、相互扶助の美德が咲き、豊かな生活が展開し、国際社会に高く評価される日本が形成されるであらう」と。⁹⁶

一方の蠟山は異なる視点から述べる。彼によると、「官僚的独占資本主義」に対抗すべき社会主義が「権力的コムプレックス（錯倒因）」である階級と民族の何れかに捕われてしまった。その結果前者が「ソ連式共産主義」に、後者が「アジアズム的国民社会主義」に至ったとする。そこで彼が新たに提唱したのが民主社会主義であった。

この両者（ソ連式共産主義とファシズム）を生み出した二十世紀の社会主義運動の分裂は、いずれも、民主主義の基礎の脆弱は国々の現象であることに注意しなければならない。

階級と民族という暗礁は、社会主義運動にとつて最も現実的な意味での権力の抛り所ではあるが、また同時に、社会主義運動に大きい亀裂を与える障物である。この二大現象―階級と民族―を乗り越え、それによつて生ずるひびや割れ目を縫つて、近代国家の完成を完うするものは何か。

それが民主社会主義の使命である。

民族や国民の問題は左派社会運動にとつてアキレス踵であり、これらの問題がもつとも顕現したのが一九三〇年代の「転向」であった。それゆえに、階級と民族の相剋を乗り越えようとする民主社会主義に佐野、鍋山たちなど「転向者」が共感したことは想像にかたくない。

実際、この民社連に右派社会党の一部に混じつて佐野、鍋山、三田村、堅山が発起人に名前を連ねたほか、のちに佐野は理事に、鍋山、堅山、三田村は評議員になった。

民社連の事業は、「日本における民主的社会主義の原理と政策の研究」、「宣伝普及」（出版、講演など）、「常設的教育機

関の設置」などである。本格的に事業が始まるのは一九五二年二月頃からで、青年講習会の開催や地方を回って「民主政治学校」などを開催した。二月二〇日から三月五日まで開かれた農村青年講習会（東京社会事業会館）には佐野、鍋山とも講師で参加した。¹⁰⁰

この民社連結成の動きに鍋山ら世民研関係者も呼応した。機関誌『主張と解説』一九五一年一月一日号で「民主社会主義の理論と実際」の特集を組み、矢部、大野、鍋山、草野が民主社会主義の政治学、経済綱領、労働運動、アジア政策をそれぞれ論じた。ここで鍋山は「民主社会主義」について次のように言う。

民主社会主義は、近代的社会構造の重大要素たる階級対立関係に目を覆うのではない。しかしまた、共産主義や、マルクス系統の社会民主主義のごとく、資本と労働の不和解的階級対立のみが、近代社会の内部構造だとは考えない。したがってまた、その階級闘争の絶望的激化と、それによる資本家階級の一掃的絶滅をみざるかぎり、社会主義の実現はないとするような戦略構想をとらない。資本と労働の対立関係においては、あくまでも労働の立場に立つて闘いながら、労働者の生活内容を、一つ一つ具体的に改善し、向上せしめ、これを確保してさらにより高きへ前進しようとするプロセスそのものを、社会主義の漸次的形成とみるのが、民主社会主義である。¹⁰¹

階級闘争という呪縛から社会主義を解き放つたものこそ民主社会主義であり、そこに「転向者」鍋山は共感した。この共感ももう一方の「転向」の雄佐野も同じだった。佐野は、一九五二年四月過ぎに執筆した「新社会主義政策建設論」で次のように述べる。

日本の社会主義革命は民主社会主義の原理に立脚することがもつとも妥当である。民主社会主義は主として西欧諸国の百数十年來の社会主義運動の経験と精神的努力の集中物であつて、単に西欧諸国だけでなく世界の社会主義運動一般

の原理をふくんでゐる。しかしこの原則を如何に日本化すかがわれわれの当面の切実な問題である。それは日本さらに東洋人の世界観、社会構造、歴史的伝統等にてらしあはせて決定されねばならぬ。個人の権威と自由を要請する民主主義と共に過去一世紀以来東洋人の精神的動力となつてきた民族主義や共同社会的な社会観や、非個人主義的な東洋的倫理観等を基礎とするところの独自の思想体系が必要である。政治経済の面においては西欧の経験を参照するとともに西欧社会が今日まで通つてきた諸過程をいちいちくりかへすのでなく、それを超えた意識的な計画性と国家的な集産主義的方法さらに西欧社会が既に失ふたかにみえる革命的な力の感情と行動力がなければならぬ。日本の新しい到達に際して日本的な民主的社会主义の原理の発見とこれを実現する社会主義政党的建設がなによりも要請される。これなくして日本の眞の独立はありえない。¹⁰⁸

このあと佐野は民社的な政党を建設するにはまず右派社会党だとして、その欠陥と「よい面」双方を指摘しながら、「新社会主義政党」となるべきことを訴えた。

(三) 非公認の立候補

民社連結成直後の一九五二年一月、鍋山は右派社会党に入党手続きを済ませ、次の総選挙に出ることを宣言した。¹⁰⁹この具体的な動きが始まるのは四月末頃からである。

鍋山の後援会を立ち上げることに、その「趣意書」(六月一日付)を矢部貞治が執筆した。ここには「民主主義の立場から、共産主義批判と労組民主化のため果しつゝある役割を、極めて高く評価する」¹¹⁰と記され、鍋山の逸材ぶりが記された。

後援会の世話人には有田八郎、大蔵公望、大野信三、海東要造、菊川忠雄、佐野学、斎藤勇、重枝琢己、進藤竹次郎、滝田実、西尾末広、星加要、町田辰次郎、松岡駒吉、三輪寿壮、安岡正篤、矢部貞治、矢次一夫、山名義鶴、湯沢三千男

が名を連ねた。また後援会の発起人には彼らを含む約一六〇名の名があり、中には笹川良一、田中清玄などもいる。発会式が開かれたのは六月一九日で、出席した矢部の日記に次のようである。

直ぐ車で送つて貰つて日本クラブに行く、鍋山君の後援会の発会式をやるので、別室に世話人が集つて食事していた。わざわざ大阪から出て来たという進藤さんもいて、有田一郎、湯沢三千男、大蔵公望、安岡正篤、矢次一夫、佐野学、星加要、大野信三の諸氏。

一時過ぎから百数十人出席して、発会式。野村吉三郎、沢田廉三、富吉栄二（？）、岩畔豪雄、松岡駒吉、井上縫三郎、橘君とか多種多様の顔触れ。社会党右派の連中もいろいろ来ていた。

星加君が開会を言い、西尾末広氏を座長にし、僕が先ず趣旨を説明し、大野君が経過を報告し、有田、湯沢、八木、青木一男、富吉、村上秀子、村田哲夫などが祝辞を述べた。非常にいゝ会であつた。¹⁰⁵

世民研はもちろん、右派社会党や労組の後押しがあることがよく分かる。世民研機関誌『主張と解説』でも特集「鍋山貞親とはどんな男か」を組み、矢部貞治、山浦貫一、八木秀次、佐野学、大野信三、上条愛一、星加要、風間丈吉らが鍋山を応援する文章を寄せた。その中でも付き合ひの長い佐野は、鍋山を次のように紹介した。

今の日本の最も大きい欠陥の一つはよい社会主義政党のないことである。現在、右社や農協や社民の間に統一ばなしの出ているのはけつこうなことである。もつと大胆にひろく吸収して事実上新党建設までゆかねば意味がない。同時に右と左とはハッキリ分れてをるべきである。鍋山君も（それから私も）右寄りである。右は保守を意味しない。たゞ国民の意義を高く評価するのである。社会主義は国民のためのもの、国民の力で実現するものである。日本に最も適当で且つ、最も進歩的なものは国民的な民主社会主義ということになる。ろくにできませぬ外国語で直訳した舌たらずの左

寄り社会主義は日本にもアジアにも役に立たぬ。鍋山君が右ならどうしたと見得を切つて、左と対抗して、国民的基盤に立つた新しい社会主義政党の建設者の一人になられるよう希望する。¹⁰⁶

かつて一国社会主義を奉じた二人が民主社会主義の下に集つた瞬間だった。しかし、実際に選挙戦に入つたのは一九五二年八月に入つてからである。八月二八日に抜き打ち解散が行われた翌々日に世民研事務局の草野文男が矢部を訪ねて、鍋山の選挙事務長を引き受けてくれるよう依頼する。気乗りせず鍋山、草野への恩返しのできない気持ちで引き受けた矢部だったが、翌月から応援演説に奔走した。

しかし、ここで鍋山陣営にとつて意図せぬことが起きた。立候補に際して右派社会党の公認を得られず、無所属で立たざるをえなかつたことである。鍋山は東京第三区から出馬したが、ここには右派社会党の三輪寿壮が立候補していた。鍋山によれば「とにかく、追いつめられて、心にもなき無所属を宣するほかなかつた」¹⁰⁷という。

この両立に戸惑つたのは矢部はじめ鍋山を応援する人々だった。矢部は選挙事務長を引き受けるにあたり、三輪に手紙で了承を求め、佐野も三輪との関係で鍋山の応援に困惑していた。

このため、周囲では鍋山を選挙戦から引かせる動きがあつたことが矢部日記に記されている。「九月九日夕福亭で矢次と会う。……三輪寿壮氏のため鍋山を引こめさせようという動きを、松岡駒吉氏らがやっていて岸信介を通じ矢次などにも働きかけたということ聞いた。矢次が鍋山に話したら、鍋山は松岡、三輪の社会党にはもう興味はないと答えたとのこと」¹⁰⁸

鍋山と右派社会党との間にすきま風が吹きはじめたと言つてよい。第三区は各党有力者が立候補しており、無所属では厳しい戦いとなつた。一〇月一日の開票結果は、鈴木茂三郎（左派社会党）が六九六二六票、広川弘禪（自由党）が六三〇三〇票、三輪寿壮（右派社会党）が五四〇三六票で当選した。鍋山は二二六八一票で落選し、次点とはいえ完敗だった。

落選を振り返る矢部は、「三輪との調整ができなかつた時に既に今日を予想していたこと」¹⁰⁹と日記に書きつけた。彼

は三輪と対立したことの責任をとって民社連を脱会し、鍋山もまた民社連から離れて独自の活動を歩む。

一九五三年一月に民社連は機関誌『民主社会主義』を創刊するが、ここに鍋山の名も佐野の名もなかった。レッド・パージ後の日本社会において、反共の「前衛」としての彼らの役割も変化しつつあった。前年一〇月に体調を崩した佐野は一月に入院、三月には帰らぬ人となった。奇しくもスターリンが亡くなったのと同じ月である。

おわりに

本稿は、戦前から戦後にかけて、「転向」後の佐野学、鍋山貞親がいかなる思想と軌跡を展開してきたかを明らかにした。もつとも、彼らの知られざる側面をただ掘り起こすのではなく、彼らの研究を通して既存の「転向」像に問題提起を行うことを意図している。その問いをまとめれば、「転向」とは何だったか、そして「転向者」はその後どこに向かったか、である。以下で行論をまとめつつ、その意義を明らかにしていきたい。

まず本稿では、これまで共産党との関係が専ら強調されてきた「転向」を党と一旦離して考えること、また、佐野、鍋山の「転向」を他の一般党员たちの「転向」と区別して考えることで、「転向」において新たな社会運動を目指す動きがあったことを明らかにした。

佐野、鍋山らの一国社会主義は、「状況追隨の論理」(前掲高島論文)と評価されてきたが、近年ではこの思想に「戦時変革」といった積極的な側面を認めようとする研究も存在する。しかし、いずれの先行研究も佐野、鍋山の「緊迫せる内外情勢と日本民族及び其労働者階級」の分析にとどまり、一国社会主義運動の展開、また「転向」から時を経て刊行された『日本共産党及コミンターン批判 一国社会主義に就いて』(一九三四年七月)の存在は見過ごされてきた。

この時期の一国社会主義運動には二つの方向があり得た。ひとつは「ドイツ人民の民族的(国民的)・社会的解放のための綱領宣言」(一九三〇年八月)を発表したドイツ共産党の方針に沿う方向、もうひとつは民族統一戦線に傾斜してい

く中国共産党の路線に近づく方向である。戦前は専ら前者の方向、つまり反ファシズムに自らの運動を位置づけていくことになるが、その過程で佐野、鍋山ら創始者の一国社会主義を脱色し、より広範な社会運動の結節点となる運動が目指されたことは重要である。

しかし、佐野や鍋山が悩んだ民族と階級の関係をどのように考えるかという問いは戦後まで持ちこされる。この一国社会主義運動は勢力を得ぬまま頓挫し、運動に関わった人々は日中戦争以後の戦時帝国体制に組み込まれていく。

その後、日中戦争、太平洋戦争の勃発など時間と事件を重ねるにつれ、佐野、鍋山の「転向」も多層化した。一度目は、日中戦争後における汎アジア主義への傾斜である。この「転向」と帝国との関係は前掲戸邊論文でも言及されたが、佐野、鍋山の手記が分析の対象とされなかったために、「服役中から国体の純粋性にのみこみ、他方で野放図なアジア侵略の正当化が極端に進み、思想的な深化もない以上、組織・理論とも影響力は低い」と一様に描かれる。

一国社会主義にはもともと汎アジア主義が組み込まれていたが、前者の運動低迷と「戦時」の到来は両主義の関係を変化させた。佐野の中では次第に階級より民族が重視され、資本主義の変革が修正に変化することで、一国社会主義は国民主義に転じていく。鍋山もまた戦争と民族の発展を肯定し、皇室中心主義に至るだけでなく、一時は評価した中国共産党を批判した。

その後、日中戦争の進展とともに、彼らは獄中から「対支工作」の提言を行うが、国策との緊張関係において両者の違いがはつきりと現れてくる。佐野は国民主義のアジア的展開や皇道主義を中心とする汎アジア主義の採用など国策に沿う論理を展開する一方で、鍋山は民族蔑視論や経済開発論に潜む帝国主義的思考に警鐘を鳴らし、戦時下日本の体制変革を訴えていたことは見逃されるべきではない。

しかし、太平洋戦争勃発後の彼らの「転向」は、次第に社会変革から自己変革へ向かう。懺悔道への傾斜と言ってもよく、特に佐野に著しい。もはや一国社会主義、汎アジア主義は無くなり、天皇を神とする宗教へ至る。このとき定義される「転向」とは天皇への帰依のもと、社会から自己へ、そして「西洋」から日本へ向かうものであり、「近代」からの離

脱であった。出獄後の佐野はひたすら懺悔道と研究に進み、鍋山は中国大陸に新たな活躍の場を求めて、それぞれの戦後を迎えることになる。

日本の敗戦は、「転向」の針を戻すものでもあった。佐野の場合は一国社会主義への回帰である。しかし、その位置づけは変わっている。戦前のそれはドイツ共産党が出した路線へ近づいたが、戦後のそれは最新の共産主義として中国共産党の路線（新民主主義）の周辺に位置づけられた。

民主主義から社会主義へ、民族の重視、民主的統一戦線の結成。再建した一国社会主義運動によってこれらの実現を目指した佐野だったが、有権者は関心を示さなかった。「転向者」というレッテルもさることながら、その思想は戦後も生き続ける戦時の亡霊にしか映らなかつたろう。その後、一国社会主義という看板を下ろして、佐野が近づいて行つたのが民主社会主義だった。

一方の鍋山は、北京からの帰国後、佐野らの党や労組の誘いに乗らず、独自の道を歩む。鍋山は、自らが考える民主主義を打ち出したものの、佐野のような思想の提示や政治運動には乗り出していない。佐野が共産党との提携を目指した姿に比べれば、戦後の彼は、ひたすら「自己批判」としての共産党批判を続けることになる。一方で、彼は世界民主研究所に抛りながら、多くの政治家や労組活動家らと交流し、これらが労組民主化運動の支援につながっていく。

この間も、鍋山を悩ませたのは、民族と階級の関係だった。解決不能な問いとして戦後の共産主義運動でも生き続けることを理解した彼は、「転向」が過去の問題でないことを再認識する。これは佐野も同様だった。民族と階級の対立関係を克服するために、彼は、民族をあらゆる社会結合の奥にあると解して、民族が階級や国家の奥に入りこむと考えた。

そして、この民族と階級の対立をまさに止揚しようとした試みが民主社会主義だった。その活動として生まれた民主社会主義連盟に彼らが参加するのは自然の成り行きといつてよい。しかし、民主社会主義には、相互扶助として社会主義を捉えながらも、朝鮮戦争や冷戦を背に統制経済論や「アジア後進性」打破など戦時の影が差している。かつての「転向者」として戦時を背負いつづけた佐野、鍋山もこの思想に接近するが、佐野はまもなく病に倒れ、鍋山も落選後は民社連から

離れていった。

本稿は、佐野、鍋山という「転向」の震源地を再検証することで、「転向」の内実とその後の軌跡に焦点を当てた。しかし、「転向」の全貌を明らかにするにはまだ至っていない。今後、一般党員と「転向」の関係、また地域史から見た「転向」の諸相を明らかにすることで、その全体像に迫ることが課題になるだろう。

本研究は、科研費（若手研究B、24720035）の成果である。

註

- ¹ 佐野学の軌跡は「年譜」（佐野学著作集刊行会編『佐野学著作集』第五卷、一九五八年六月、佐野学著作集刊行会）参照。鍋山貞親の軌跡は「鍋山貞親年譜」（鍋山貞親著、鍋山歌子編『鍋山貞親著作集』上巻、一九八九年五月、星企画出版）参照。
- ² 世界民主研究所編『転向十五年』五六頁、一九四九年二月、労働出版部。
- ³ 米谷匡史「戦時期の社会思想 現代化と戦時変革」『思想』一九九七年一二月号。
- ⁴ 戸邊秀明「転向論の戦時と戦後」『岩波講座 アジア・太平洋戦争三 動員・抵抗・翼賛』二〇〇六年一月、岩波書店。「転向」の先行研究の整理は同論参照。
- ⁵ 佐野と部落解放運動の関係を扱った研究に黒川伊織「佐野学における唯物史観の受容と部落問題の発見」（『部落解放研究』二〇一二年三月号）、関口寛「初期水平運動と佐野学 史料紹介「水平運動」」（『部落解放研究』二〇〇八年一〇月号）などがある。
- ⁶ 「転向」以前、同語は党内で肯定的な意味で用いられたことは藤田省三「昭和八年を中心とする転向の状況」（思想の科学研究会編『共同研究 転向』上巻、改訂増補版、一九七八年二月、平凡社）参照。
- ⁷ 『特高月報』一〇頁、一九三三年七月二〇日、内務省警保局保安課。

¹⁸ 「緊迫せる内外情勢と日本民族及び其労働者階級」は謄写刷として発行されたもの（発行年、発行所不明）、『調査彙報』号外（一九三四年三月、陸軍省）、『思想研究資料』第三六輯（一九三三年七月、司法省刑事局）にそれぞれ収録されたものが確認できた。以下引用は『調査彙報』に拠る。

。彼らが定義する「民族」は次の五つの特徴を持つ。ひとつ目は「歴史的生成物」であり、二つ目は「同一言語を語る」、三つ目は「同一生活区域（大抵の場合、同一政治的領土である）に住む」ものであり、四つ目は「同一経済体系内にあるもの」であり、五つ目は「その成員に共通する精神的心理的個性」を持つ（同前、一〇六、七頁）。

¹⁹ 同前、一一八頁。この関係につき命題が四つ出され、民族が階級対立の原始性、野蛮性を和らげること、民族における進歩的階級が民族進歩の担当者であること、一民族の進歩は民族内の階級交替と関連すること、民族的統一が国家組織として表現されている場合はより階級交替が円満であることが挙げられた。

²⁰ 同前、四四頁。

²¹ 同前、五九頁。

²² 「転向」後の反響に対する佐野、鍋山の所見は佐野学、鍋山貞親「転向の後に来るもの 独中通信」（『文藝春秋』一九三三年九月号）参照。

²³ 「資料 われわれの選択」運動史研究会編『運動史研究 一七』一九八六年二月、三一書房。彼らの声明書には一国社会主義運動の提唱、汎アジア主義、日本民族賛美論に対する言及はなく、杉浦のみ「皇室の下に勤労者人民政府の樹立」を提唱するが一国社会主義とは異なる。

²⁴ 「佐野、鍋山の理論は皮肉！案外不成績 七月末の転向者数判明す 七百四十八名」好成績』『社会運動通信』一九三三年九月六日号。不二出版発行の復刻版を用いた。

²⁵ 前掲『佐野学著作集』第五卷、九四五—九六五頁。

²⁶ 「転向巨頭」の控訴審の様子は『社会運動通信』一九三四年三月三十一日号から四月二十五日号まで掲載され五月二日に判決が下る（第二次共産党転向巨頭に歴史的判決降る』『社会運動通信』同年五月一二日号）。

²⁷ 「中尾勝男と祖母はるさん』『社会運動通信』一九三四年六月二一日号。

²⁸ 『特高月報』五頁、一九三五年八月二〇日、内務省警保局保安課。

²⁹ 「一国社会主義党組織図」（三月十五日宮川警部報告）。「鍋山貞親氏に聞く」運動史研究会編『社会運動史研究 五』一九八〇年二月、三一書房。

³⁰ 「高瀬清宛佐野学書簡」一九三四年五月一〇日付、法政大学大原社会問題研究所蔵。

³¹ 『遺稿・西村祭喜自伝』二一〇頁、一九七二年六月、西村充。

²³ 「一国社会主義テーゼ草案」。

²⁴ 「一国社会主義運動ノ状況ニ関スル件」(三月二日埼玉県通報)。

²⁵ 「佐野・鍋山等の転向派」愈々美談へ乗出す。西村祭喜氏等が政治新聞に抛り「一国社会主義運動」『社会運動通信』一九三五年六月二八日号。『日本政治新聞』二二六、九号は「川崎堅雄関係文書」(国会図書館憲政資料室)にあるが、現在整理中。

²⁶ 『日本政治新聞』創刊之辞』二六七頁、『思想月報』一九三五年八月、司法省刑事局。

²⁷ 「一国社会主義、何処へ?」政治新聞の問題。西村氏の編輯同人辞去声明。『社会運動通信』一九三六年二月二日号。

²⁸ 河内午之助「政治新聞の立場(上)」政治新聞の立場(下)『社会運動通信』一九三六年二月二日号、一三日号。

²⁹ 『特高月報』一六六頁、一九四二年九月二〇日、内務省警保局保安課。

³⁰ 「今度は警視庁が転向者に救ひの手 更生の前途を塞ぐ暗礁は只一つ」『就職難』『社会運動通信』一九三四年八月三〇日号。「転向者のための保護観察所設置 司法省積極的に乗出す」『社会運動通信』一九三五年一〇月三日号。一九三六年五月末時点で思想犯検挙者五九〇〇〇人、起訴四一八〇人、起訴猶予九〇五九人、執行猶予二一四四人、執行後釈放者九二九人、入獄中五〇九人(転向者二八二人、非転向一二〇人、准転向一〇七人)がいた(思想犯保護観察法 十一月から実施)『社会運動通信』一九三六年五月三〇日号)。

³¹ 『特高外事月報』一九三七年一〇月二〇日、内務省警保局保安課。以下同資料からの引用による。

³² 『特高外事月報』一八頁、一九三八年五月二〇日、内務省警保局保安課。『特高月報』七頁、一九三九年二月二〇日、内務省警保局保安課。

³³ 一九四〇年五月の時点で、大陸で活躍する「転向者」として約六〇人が、出征者も約一〇〇任がいたという(「左翼転向者の最近の状況」『社会運動通信』一九四〇年五月二五日号)。

³⁴ 西村祭喜は一九三八年四月から大民会蚌埠支部指導部長、中尾勝男は翌年四月から上海経済研究所營業部長、河内午之助は同年三月から同所員、のち上海商工会議所員在籍(奥平康弘編『昭和思想統制史資料』中国情勢篇、三〇二、四、一〇頁、一九八一年一月、生活社、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref:A06030040200、昭和十九年六月三十日現在。在華中左翼転向者略名簿(国立公文書館)。

³⁵ 宇田の軌跡は協定会編『農村に於ける特色ある教育機関』(一九三三年五月、協定会)二六八頁参照。宇田と佐野、鍋山の関係は「又左翼運動者の転向にも力を尽し、殊に佐野、鍋山両人に対しては平田検事から懇望され、面会に著書に精神的訓育を与へた転向の陰の親とも言ふべき人で、今日でも佐野、鍋山は同氏の人格に私淑して獄中からしばしば、便りを同氏のもとに寄せてゐる程」とある(『最近我国思想犯教化に関する各種消息概要』(その二)一二頁、一九三九年一〇月、楠原祖一郎)。それ以外に宇田と佐野、鍋山の関係として『学園と指導精神』第二輯(一九三五年九月、東洋女子歯科医学専門学校校友会)所収の「拙著『日本文化に及ぼせる儒教の影響』に對する井上日召・佐野学・鍋山貞親三氏の私信」がある。

³⁶ 鍋山貞親「山名さんへの追憶」四八頁、『山名義鶴の記録』一九六八年九月、山名義鶴の記録刊行会。

『日本』は一九二五年に立憲政友会幹部小川平吉の支援を受け上杉慎吉、北吟吉、蟻川新、渡辺千冬、下位春吉らによって創刊。「赤化」排撃、日本主義、対外硬が同紙の基調だった（小松光男編『日本新聞十年史』二二―一五頁、一九三五年七月、訂正再版、日本新聞社）。

井村哲郎編『満鉄調査部 関係者の証言』五二九、三〇頁、一九九六年五月、アジア経済研究所。

朴熙道「政治的思想家の執るべき態度」『東洋之光』一九三九年二月号。

『思想月報』一九四三年九月。以下同資料からの引用による。

前掲『転向十五年』一四九―一五二頁。戦後の軌跡は細田正博「佐野学とは何者か？」（『真相』一九四六年十一月号）にも記載されたが今後検証が必要。

『我が獄中の思想遍歴 佐野学手記』二五頁、一九四四年八月、司法省刑政局。

同前、九九頁。

鍋山貞親「事・志・流」『主張と解説』一九五二年一月号。

『大蔵公望日記 第四巻 昭和十七―二十年』二二〇頁、一九七五年一月、内政史研究会、日本近代史料研究会。

前掲『鍋山貞親年譜』。

岡崎次郎「マルクスに凭れて六十年 自嘲生涯記」一七二頁、一九八三年二月、青土社。岡崎ら鍋山と交流のあった周囲の人物も「どうして日本の中国侵略を是認して積極的に協力するようになったのか、ということについては誰も聞きもしなかったし、彼（鍋山）も語ろうとはしなかった」（同前、一七三頁）。

富塚清「ある科学者の戦中日記」三〇、一頁、一九七六年一月、中央公論社。同資料は小堀聡氏よりご教示頂いた。

同前、三三、四頁。

佐野学「日本社会党に与ふ」『朝日新聞』一九四五年一月七日付朝刊。

戦後における佐野の「国社会主義論は同『解説・日本革命』（一九四六年四月、時局月報社）一九、二〇頁参照。

「『国社会主義』 同志の糾合を図る佐野学氏」『読売新聞』一九四五年一月二一日付朝刊。

前掲「日本社会党に与ふ」。規約には、「当面封建的勢力を打倒し生産者本位の革命的民主主義を獲得する努力を通じて社会主義の建設に到達すること、並に対外的に国家的独立を回復することを目的とす」（『国社会主義者同盟規約』八八頁、前掲『佐野学著作集』第五巻）と書かれている。

前掲「『国社会主義 佐野学・鍋山貞親』一九九頁。

『労農前衛党 佐野、鍋山氏らが結党準備』『読売新聞』一九四六年八月二一日付朝刊。鍋山は『労農新聞』一九四八年二月一日付に「複雑化した国共関係」を投じた。

※ 「綱領草案」は改稿・加筆され「労農前衛党綱領」（『労農新聞』一九四七年三月八日号）掲載。「綱領草案」には「天皇制」に関する項目もあり、廃止説には反対、「天皇制支持の国民感情には、日本勤労国民大衆が国家的独立及び国民的団結を保持せんと欲する肯定的感情がある」としたうえで、「天皇が国民大衆と直結し、その私有財産を變遷し国民と苦しみを分かち合ひ、日本の民主革命と社会主義に率先努力せられるやう積極的な改革を断行する」とある。

※ 同紙は一、三〇五、七〇九号（フランクゲン庫所蔵）と二号のみ閲覧。同志社大学人文科学研究所図書室に三号原紙所蔵。

※ 『昭和二一・一二・一〇・一一』於東京松源寺 拡大中央委員会記録 労農前衛党準備会。「結党を決議 国民大衆の要望にこたえて わが党準備会拡大中央委員会ひらく」『労農新聞』一九四七年二月一日号。それ以外には地方選挙対策が議論されたほか、書記長に風間 顧問に近藤栄蔵が就任することが了承された。

※ 「日本革命史に歴史的一齣 労農前衛党結党」『労農新聞』一九四七年三月二〇日号。

※ 『労農前衛党』一九四七年四月、労農前衛党本部教育宣伝部。

※ 佐野学「辞任の挨拶」『労農』一九四七年七月二五日号。同誌は一〇五号（フランクゲン庫所蔵）のみ閲覧。

※ 「党名決定す 新しい意気と熱を以つて『日本労農党』の名の下に！」『労農』一九四七年九月二〇日号。

※ 矢部貞治著、日記刊行会編『矢部貞治日記 樺の巻』一五〇頁、一九七四年八月、読売新聞社。

※ 「日本政治研究所 趣旨と規約」『矢部文書』一六一―二六五、政策研究大学院大学所蔵、以下『矢部文書』。

※ 「日本政治研究所 会報 第一号」『矢部文書』一六一―二六五。

※ 杉之原舜一『波瀾万丈 一弁護士の回想』六四頁、一九九一年一〇月、日本評論社。

※ 船橋破魔雄「私の追憶」一五九頁、槐樹会刊行会編『北支那開発株式会社之回顧』一九八一年一〇月、槐樹会刊行会。

※ 倉橋義博「石本恵吉翁を想う」『師と友』一九七四年九月号）によれば、石本は岡野進（野坂参三）との会談を計画し和平工作に従事したこと、敗戦後は居留民平和委員長となったが、国民政府から中国共産党との「密謀」が疑われて帰国を命ぜられたという。帰国後の一九四九年二月に個人雑誌『樸』を創刊した。

※ 前掲『鍋山貞親著作集』上巻、一九六頁。鈴木重二「研究所草創の頃」（『主張と解説』一九五五年一〇月一日号）には「九月末」、「鍋山貞親氏の歩んだ道」（『主張と解説』一九五二年六月一日号）には「二月」とあるが、世民研一〇周年記念式が一九五五年一〇月四日に開かれたので一〇月前後だろう。

※ 石田の略歴は「年譜」『石田英一郎全集』第四卷、新装版、一九七八年一月、筑摩書房）参照。西北研究所時代の回想は「学生運動の回顧」（前掲『石田英一郎全集』第四卷）に記述。

※ 鷺谷嘉兵衛「在蒙懐旧断片」（『高原千里 内蒙古回顧録』一九七三年九月、らくだ会本部）、同「在蒙懐旧断片」（蒙疆（中央）学院史編纂委員会編『蒙疆（中央）学院史』一九九二年六月、安城学園）参照。本名鷺谷武二。京都学連事件で検挙起訴され、京大を放学

処分、一九三七年復学、翌年卒業。

²³ 石田、鷲谷と京都学連事件で検挙された人物に宮崎菊治がいるが、のち福岡共産党事件で起訴された宮崎菊次と同一人物。京都学連事件予審終結決定書の宮崎菊治の本籍地、住所と宮崎菊次の住所が同一（「長崎では三名没落 鶴山君等は反対 転向問題をめぐって」『社会運動通信』一九三三年八月一日号）。出所後は北京の新民会、華北総合調査研究所などで勤務した可能性が高い。

²⁴ 全先喬と鍋山の交友は前掲「鍋山さんと北京の頃」参照。一九四三年頃矢次夫の紹介で全先は北京に向かう「鈴木一郎」に引き合わされた。一九四五年九月に全先は草野を鍋山に紹介したほか、「民主策進懇話会」設立後援者に「L将軍」がいたことを回想する。

²⁵ 草野の略歴は馬場公彦「戦後日本人の中国像 日本敗戦から文化大革命・日中復交まで」（二〇一〇年九月、新曜社）四五九頁参照。

²⁶ 氏野の略歴は佐藤英和編「追悼・氏野博光」（一九七六年一月、こぐま社）参照。氏野も「転向」後国策研究会を経て華北総合調査研究所勤務、華民国新民会中央総会囑託も勤めた。敗戦後は北京市日僑自治会囑託。藤原英夫によれば、「華北総合調査研究所の所員だった故宮崎哲次氏」から氏野を紹介されたという（同「辱知二十八年間を想起して」前掲「追悼・氏野博光」）。

²⁷ 藤原については永井英治「戦中期北京輔仁大学の日本人教員とその戦後 成立期新制大学の教員移動に関する試論」（『近代日本研究』二〇〇六年）参照。藤原は一九四三年四月に輔仁大学に招聘され、敗戦・帰国後は氏野とともに佐野の日本政治経済研究所に関与。

²⁸ 国松文雄「わが満支廿五年の回顧」一三五頁、一九六一年一月、新紀元社。

²⁹ 前掲「辱知二十八年間を想起して」二三、四頁。

³⁰ 中島辰次郎「馬賊一代（下）謀略流転記」二一九頁、一九七六年五月、番長書房。日高機関には国松や山口も所属していたという。

³¹ 『一九四七年一月〜二月 内務省情報調査資料 その二』頁数無記載。

³² 前掲「矢部貞治日記」一九一頁。

³³ 「世界民主研究所規約」『矢部文書』一六一―一三七〇。

³⁴ 「謹賀新年」『主張と解説』一九五二年一月一日号。

³⁵ 前掲「山名さんへの追憶」四九、五〇頁。

³⁶ 二月から表題が「政治的」（訂正）『問題と解説』第二輯、一九五〇年二月二七日、世界民主研究所）との理由で『問題と解説』に變更後、一九五一年二月から『主張と解説』を創刊。これ以外には『亜細亜月報』や『亜細亜政経資料』を発行。

³⁷ NARA所蔵CIA服部卓四郎ファイル内の報告書「JIS（日本インテリジェンス・サービス）グループと日本の民族的復活 現在と将来」（一九五一年五月）には、鍋山の諜報活動や占領軍との接触に関する以下の記述がある。「堀内干城やFEARS（東亜問題研究会）と接触すると同時に、自分の考えと情報をアメリカ当局に売ろうと試みている。また川口（忠篤）機関と非公式に接触した。現在彼は法務府特別審査局と外務省調査課に情報をもたらしていると報告されているが、情報の質は取るに足らないものといわれている。」（NARA, RG263/230/86/22/7）

- 92 鍋山貞親『転換期に立つ』一七―二九頁、一九四八年二月、日東出版社。
- 93 同前、四一―四四頁。
- 94 鍋山貞親『日本共産党批判』六九頁、一九四九年六月、勤労時報社。
- 95 鍋山貞親『労働組合民主化の意味』『経営者』一九四九年一月号。
- 96 前掲『矢部貞治日記』二四二頁。
- 97 同前、三〇六頁。
- 98 以下、「独立青年同盟とは？」「独立青年同盟に関する資料」（浅沼稻次郎関係文書）四八四、四八五、国会図書館憲政資料室所蔵より引用。
- 99 「独立青年同盟 解説」『民主化同盟』一九四九年八月一〇日号。
- 100 前掲『矢部貞治日記』三三八頁。
- 101 同前、五五五頁。
- 102 「民主社会主義連盟創立趣意」『矢部文書』五二―二四。
- 103 「民主社会主義連盟」『矢部文書』五二―二三。
- 104 波多野の民主社会主義論に対する批判は向坂逸郎「波多野鼎氏の民主社会主義論」（『社会主義』一九五一年一〇月号、一一月号）参照。「社会民主主義」と「民主社会主義」の相違は「社会民主主義と民主社会主義」（『時事通信』一九五二年五月一六日号）など参照。
- 105 同年一月頃創刊の機関誌『民主社会主義連盟時報』第二号（一九五二年二月五日発行）に鍋山が「再軍備議会」を寄せたほか、第二委員会（法政、行政担当）で委員長矢部、委員三輪寿社、佐野学、小島利雄、三田村四郎、主事風間丈吉が「治安態勢と憲法問題」を討議したことが記されている。第三号（同年二月二〇日発行）に佐野の書評が掲載。
- 106 鍋山貞親「民主社会主義の労働運動」『主張と解説』一九五一年一月一日号。
- 107 佐野学著作集刊行会編『佐野学著作集』第二巻、一〇五五、六頁、一九五七年一月、佐野学著作集刊行会。
- 108 前掲「事・志・流」。
- 109 「鍋山貞親後援会趣意書」『矢部文書』一一―〇八。
- 110 前掲『矢部貞治日記』六二四頁。
- 111 佐野学「リーダーとしての鍋山君」『主張と解説』一九五二年六月一日号。
- 112 鍋山貞親「私はなぜ落選したか」『経済展望』一九五二年一月二月号。
- 113 前掲『矢部貞治日記』六五〇頁。
- 114 同前、六五八頁。